

歴史博物館建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

# 高松城跡

平成 7 年度

1996. 3

香川県教育委員会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター



調査区全景（東より）



石垣全景（南東より）

## 例　　言

1. 本書は、歴史博物館建設工事に伴い、平成7年度に実施した高松城跡の発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。
3. 本年度の調査組織は、以下のとおりである。

総括	所長	大森 忠彦
	次長	真鍋 隆幸
総務	参事	別枝 義昭
	係長	前田 和也
	主査	大西 健司（平成7年5月31日まで）
	主任主事	西川 大（平成7年6月1日より）
調査	参事	糸目 末夫
	主任文化財専門員	廣瀬 常雄
	係長	大山 真充
	文化財専門員	西村 尋文
	文化財専門員	北山健一郎
	主任技師	山田 秀樹
	調査技術員	陶山 仁美

4. 調査にあたっては、次の機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）  
財団法人松平公益会、財団法人香川県県民ホール、高松市立城内中学校
5. 本書の執筆は、北山・山田、実測・製図は北山の指導のもと山田・陶山が実施し、編集は北山が担当した。
6. 挿図の一部に、国土地理院地形図（1/50,000）を使用した。

# 目 次

## 本文目次

1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 立地と環境	1
3. 調査の成果	4
4. おわりに	13

## 挿図目次

第1図 高松城跡位置図	1
第2図 調査区割図	2
第3図 周辺の遺跡分布図	3
第4図 第I期遺構配置模式図	4
第5図 第I期ST01平面図	5
第6図 第I期出土遺物実測図	5
第7図 第II期遺構配置模式図	5
第8図 第II期SE01平・断面図	6
第9図 第II期出土遺物実測図	8
第10図 第III期遺構配置模式図	9
第11図 第III期出土遺物実測図	10
第12図 第IV期遺構配置模式図	11
第13図 第IV期SA01平面図	12
第14図 第IV期出土遺物拓影	12
第15図 出土錢貨拓影	12

## 写真図版

卷頭図版1 調査区全景（東より）
卷頭図版2 石垣全景（南東より）
写真1 II-①区ST01（南より）
写真2 I-①区ST03（東より）
写真3 III・IV-①区第III期全景（北より）
写真4 IV-①区SE01検出状況（北より）
写真5 IV-①区SE01半裁状況（北より）
写真6 III・IV-①区第I期全景（北より）
写真7 II-①区第I期全景（西より）
写真8 II-①区木製樋管出土状況（西より）
写真9 石垣全景（南より）
写真10 石垣全景（北東より）
写真11 石垣根石付近断面観（南より）
写真12 II-①区石列状遺構出土鱗
写真13 石垣全景（東より）
写真14 石垣細部（東より）
写真15 柵列・石列状遺構・溝状遺構（北より）

## 1. 調査に至る経緯と経過

香川県教育委員会は、高松市玉藻町に県立歴史博物館を建設する計画を進めており、現在、実施設計を行っている。

当該地は県民ホールのすぐ南側で旧高松城東ノ丸跡に比定される地区にあたり対象面積は、5,000m<sup>2</sup>である。建設計画に先立ち、県教育委員会では平成5年度に試掘調査を実施し、当該地全域に埋蔵文化財が所在し、文化財保護法に基づく適切な保護措置が必要であるとの結果を得た。これに基づき県教育委員会は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という）と協議を進め、発掘調査を平成6・7年度に実施することで合意し、平成6年度に対象地の一部の発掘調査を実施した。今年度は残りの部分を対象とし、平成7年4月1日付けで県教育委員会とセンターとの間で「埋蔵文化財委託契約書」を締結し、センターが発掘調査を実施することとなった。

調査にあたり、対象地をI～VI区に区分した。（第2図参照）すなわち、I～IV区は東ノ丸跡にあたり、特に石垣部分をI～IV-②区とし、内側部分と区別した。V・VI区は堀の部分である。

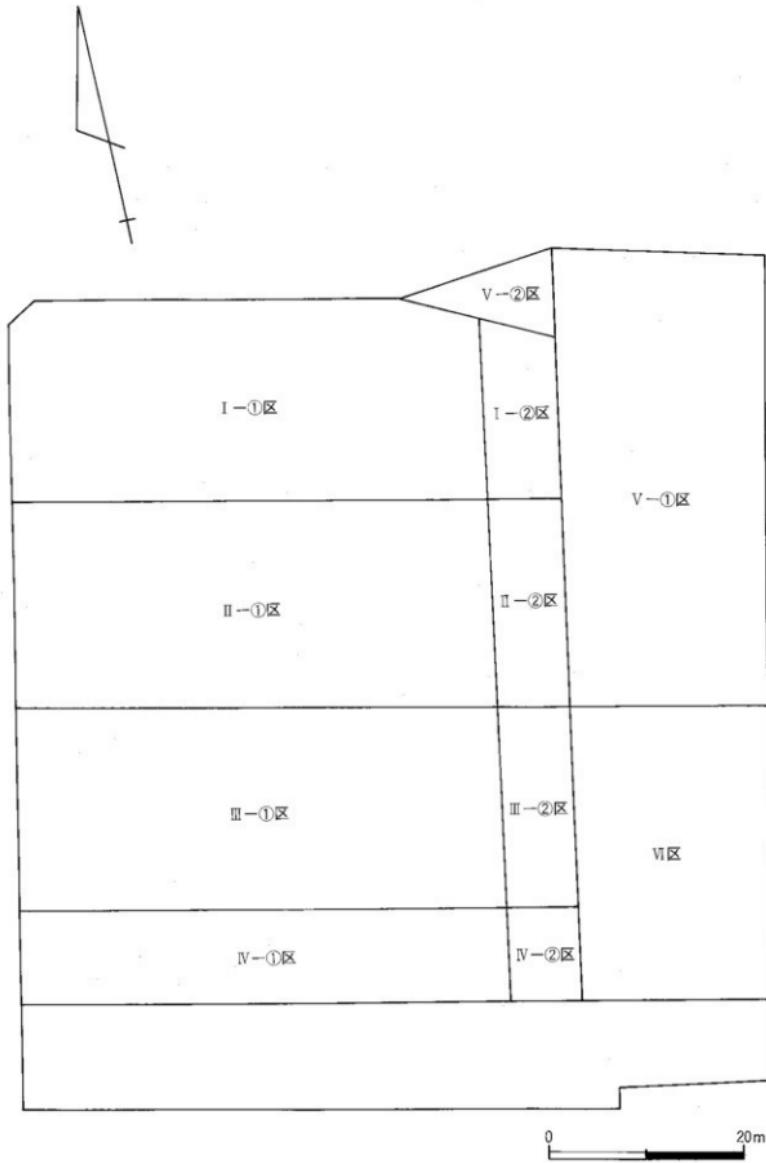
発掘調査は平成7年4月より開始した。5月より本格的に調査を進め、平成8年3月末日をもって終了した。なお、石垣は北側を一部分現状保存し、将来、露出展示される予定である。



第1図 高松城跡 位置図

## 2. 立地と環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は香川県の平野のうち、最も広大な面積を有し、東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。現在



第2図 調査区割図

の高松市街は、西に石清尾山塊、東に屋島を望み、香東川・御坊川・詰田川・春日川・新川などによって形成された高松平野（沖積地）の先端に位置し、城下町として発展してきた。高松城跡は高松平野のはば北端、高松市玉藻町に所在する。南海通記の『讃州高松府記』によると、高松城の立地条件は香東川の河口の中州にあたり、野原と称され、付近には漁村が所在していたことがわかる。香東郡野原は中世の莊園で東・北は海に面し、西南に石清尾山が天然の要害をなし、南方が高松平野に開けた海浜であった。このような立地は、いったん城郭が築かれれば攻防ともに備わった堅城となるが、軟弱な砂地の上の築城や類例の少ない水際城の繩張りには特殊な知識と経験が必要だったであろう。

高松城の歴史は天正15年（1587）、生駒親正の入封により始まる。築城工事は天正18年に完成したとされるが、当時の他城の例からすると、その後も普請や作事が続けられていたと思われる。しかし、その二代後の高俊の時に御家騒動として有名な生駒騒動が起き、寛永17年（1640）に生駒氏は改易となった。そして寛永19年（1642）に水戸徳川家より松平頼重（水戸光圀の実兄）が生駒氏の旧領のうち東讃岐12万石に封じられ、ここに親藩・高松藩の成立をみたのである。このうち、松平氏の治下に幾度か城郭改修の手が加えられることになったが、帯郭西端の侍屋敷が堀によって魚店町と仕切られて米蔵丸・作事丸（あわせて東ノ丸と呼ばれた）が新造されたのは、頼重の寛文11年（1671）からのことであるとされている。

時代は下って、明治2年（1869）の版籍奉還とともに旧城郭（中堀以内）は兵部省、のち陸軍省に接収され、また旧城郭の一帯は諸官庁の用地などに供されることとなった。その後三次にわたり行われた高松港の築港工事で旧城郭部は大幅に埋め立てられ、昭和20年の高松琴平電気鉄道の軌道変更などで、ほぼ現在の城跡の景観となった。現在は月見櫓・艮櫓などの櫓と石

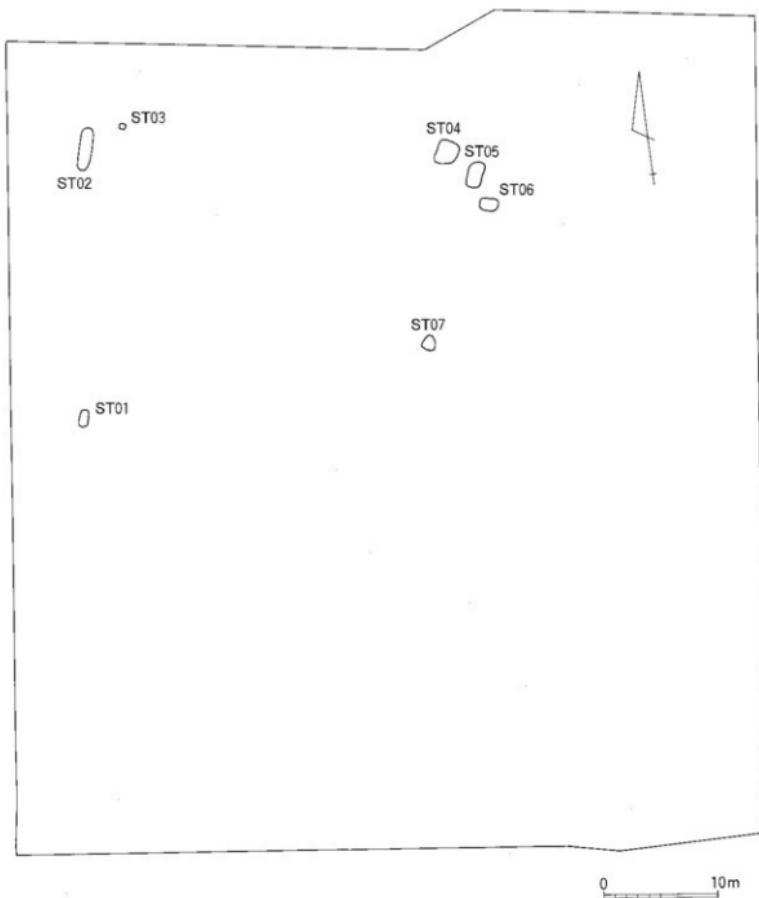


第3図 周辺の遺跡分布図

垣・内堀の一部が遺構として残るにすぎないが、なお内堀・中堀に海水をたたえ、中堀搦手に舟藏を配した往時をしのばせるものがある。

### 3. 調査の成果

当該地は先述のとおり、大きく分けて、東ノ丸跡・石垣・堀の3つに区分される。このうち、東ノ丸跡には調査の結果、第Ⅰ期～第Ⅳ期までの4つの遺構面が所在することを確認した。以下、各遺構面ごとに説明する。その後、石垣と堀についての説明をすることとする。



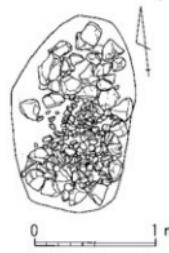
第4図 I期遺構配置模式図

第Ⅰ期・・・生駒氏による高松城築城（天正16年(1588)）以前

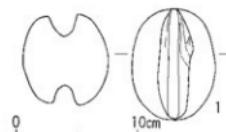
この時期には、建物跡や井戸等の生活遺構は検出していない。わずかに検出した遺構は、石を組み合わせた墓と考えられる遺構である。  
(第4図参照)

ST01 (第5図、写真1)

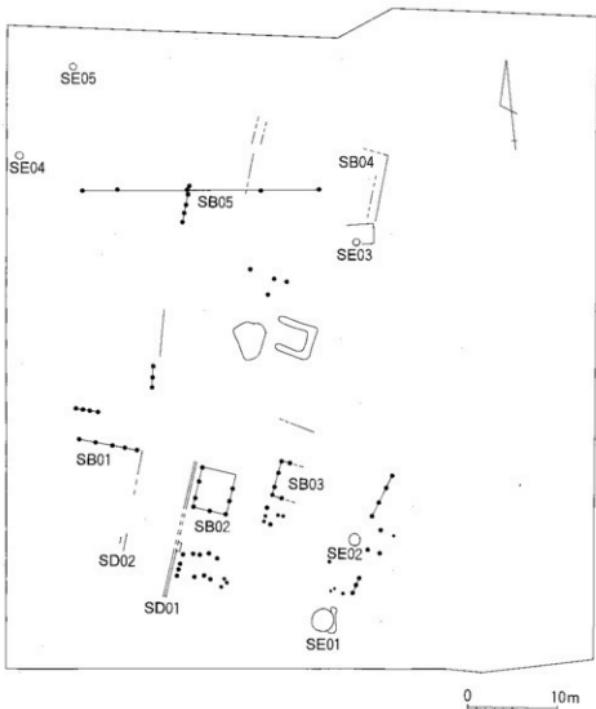
II-①区南よりの部分で検出した石組の遺構である。周囲には20cm程度の礫を並べ、底面には直径5~10cmの河原石を敷き詰めている。北側には周囲に並べられている礫と同程度の礫がまとまって検出でき、上部構造の一部である可能性がある。南北1.5m、東西約1mを測り、深さは約20cmである。埋土は黄褐色の粗砂であり、埋土中からは、有溝土錐や土質の土鍋片が出土している。第6図1は出土した大型の有溝土錐である。重量や網を掛ける溝の幅などから大型の網が推定される。同様の遺構は調査区北半部に分布しており、全部で7基確認した。その中には、埋土中に



第5図 ST01平面図



第6図 I期出土遺物実測図



第7図 II期遺構配置模式図

人骨と思われる骨片や炭を含むものもあり、埋葬施設である可能性がある。以上より、これらの石組みの遺構は漁業に携わっていたものの墓群であると考えられる。

#### 第Ⅱ期・・・築城から松平頼重による東ノ丸改修（寛文11年（1671））まで

この時期には、礎石建物跡や井戸等を確認している。また、石垣の西側を構築する以前に土地を区画したと考えられる石組の溝状遺構および柵列、石列状遺構等を検出している。（第7図参照）

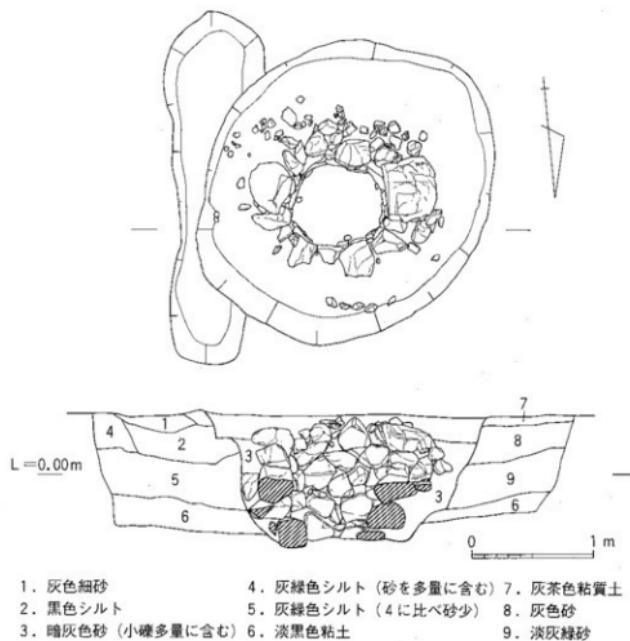
##### 礎石建物跡

確実に建物跡と考えられるものは5棟検出している。そのうち、4棟は現在の地割方向よりも約10度東へ偏っている。これは生駒氏による高松城築城およびその城下町の形成時に作られた土地区画の方位であると考えられ、したがって、これらの礎石建物跡は生駒氏の支配から松平氏による東ノ丸改修まで機能していたものであると考えられる。

もう1棟の礎石建物跡は一つの辺のみ検出したが、大型の礎石をもち、柱間は3.6m（約2間）である。主軸方位は検出した石垣とほぼ直交する方位であり、石垣の構築時もしくはそれ以後に石垣の方位に規制された配置をもっていたものと考えられる。

##### 井戸跡

井戸跡は、全部で5基検出している。そのうち、3基は石組の井戸、1基は石組で最下層に組物を据えたもの、1基は素掘で最下層に組物を据えたものである。いずれも直径約1～1.5



第8図 SE01平・断面図

mで堀方は50cmほど広がる。

#### S E 01 (第8図, 写真4・5)

III-①区南東部で検出した石組の井戸である。図示し得なかったが、最下層からは組物を留めていたものと考えられる竹製の籠が出土した。石組の直径は1m、深さは石組の部分が70cm、最下層までは、1.8mを測る。石材は花崗岩と安山岩が主として利用されている。石材の大きさは、内側が約20cm四方で控えが50cm前後のものが多い。裏込めには小礫および土が使われており、全体的に丁寧な造りである。

#### 溝状造構（写真15）

この時期の溝状造構は、石垣の南半分の下層で検出した。幅は約1m、深さは0.6mで調査区中央部から東へ流れ、南側へ90度方向を変える。堀形はV字形を呈し、土地を区画する施設であったと考えられる。

#### 石列状造構（写真15）

石垣の南半分の下層で検出したもので溝状造構のすぐ東側から検出した。検出長は約20mを測る。幅0.6mで高さ約40cm、2列に並べた石の上に平たい石を置いて高さを揃えている。上部構造としては、塀などが考えられる。石材は安山岩が主として使用されている。

#### 柵列（S A 02・03、写真15）

溝状造構と石列状造構の内側で検出した2条の柵列である。柱穴の直径は平均して70cm、柱穴間の距離は約1.2mである。2条とも15間（16穴）を検出し、規模はそれ以上である。北側は溝状造構までそれ以上は続かない。南側は調査区外へ延びるため、全体の規模は不明である。2条の柵列は柱穴の掘削面の標高などからみて同時期に併存していた可能性が高い。

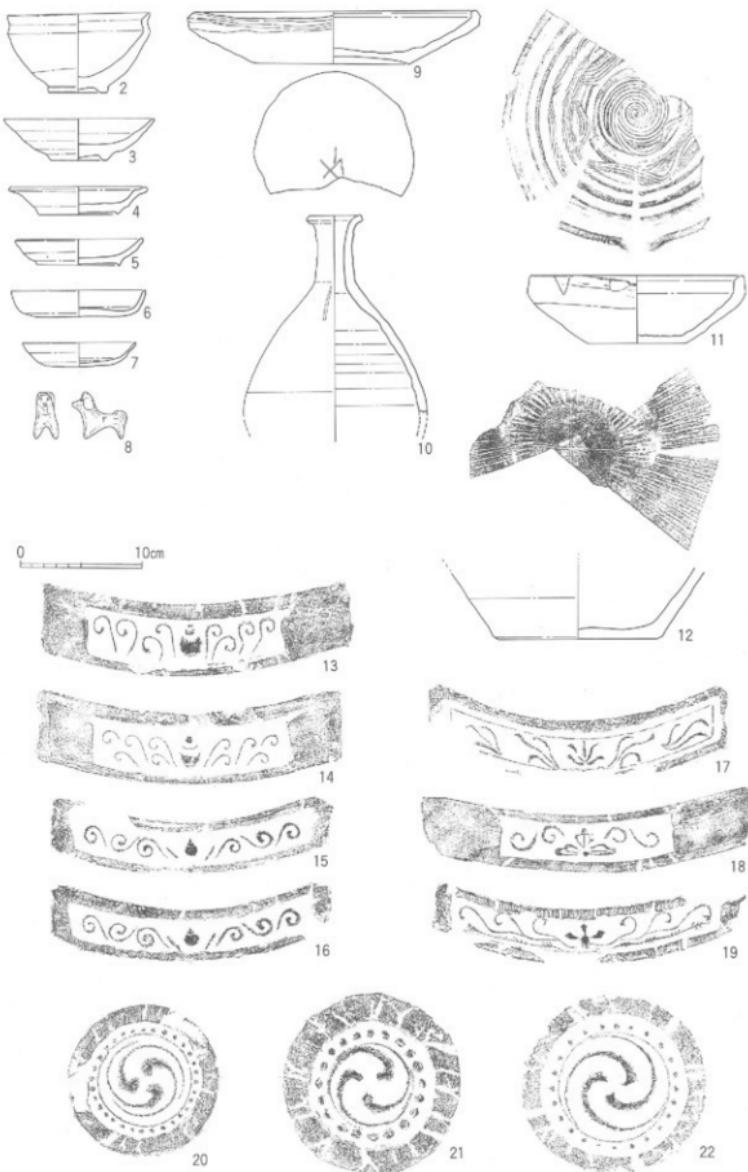
これらの3つの土地区画施設は土層の観察から石垣の西側を構築する以前に機能していたことは確実であるが、東側を構築した時期との関係、および先後関係は今後の課題としたい。

#### 出土遺物

第II期に相当する遺物を第9図に掲げた。2・3は唐津椀である。2は厚手の体部に薄い口縁部をもつ。口縁下部に屈曲する部分があり、端部はやや鋭い。高台部の径は口径の約1/2である。釉薬は内面および外面の2/3ほどに均一に灰色のものが認められ、口縁部に鉄絵が描かれている。16世紀後半～17世紀前半頃であろう。3は口径が大きく、器高が低い椀である。厚手の体部から口縁部にかけて薄くなり、口縁端部はやや丸くおさめる。内面にやや弱い稜線をもつ。釉薬は内面および外面の約1/2ほどに灰色のものが認められる。高台部は無釉である。

4・5は瀬戸美濃の皿である。4は、いわゆる折縁皿と呼ばれるもので口縁部を横方向に折り曲げ、端部をやや上方に丸くおさめる。見込部分には、円形に釉薬を剥いだ痕跡が明瞭に認められる。重ね焼きの際に土器同士が付着するのを防止するための措置であろう。5は高台部の直径が大きい皿である。高台部は低く、三角形に削り出している。釉薬は内外面ともに施釉されており、高台内部には重ね焼きをした際の円形の窯道具の痕跡が認められる。

7は土師器の小皿である。高台は無く、体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く仕上げる。底部は糸切りによる轆轤よりの切り離しで全体的な造りは丁寧である。なお、同様の土師器の小皿が大量に出土した土坑状の遺構を石垣内部で検出した。明確な堀方は不明であるが、層位的な関係から石垣を構築する以前のものであると考えられる。8は犬の土人形である。玩具の一種であると考えられる。素焼きのもので体部に若干二次焼成を受けている部分

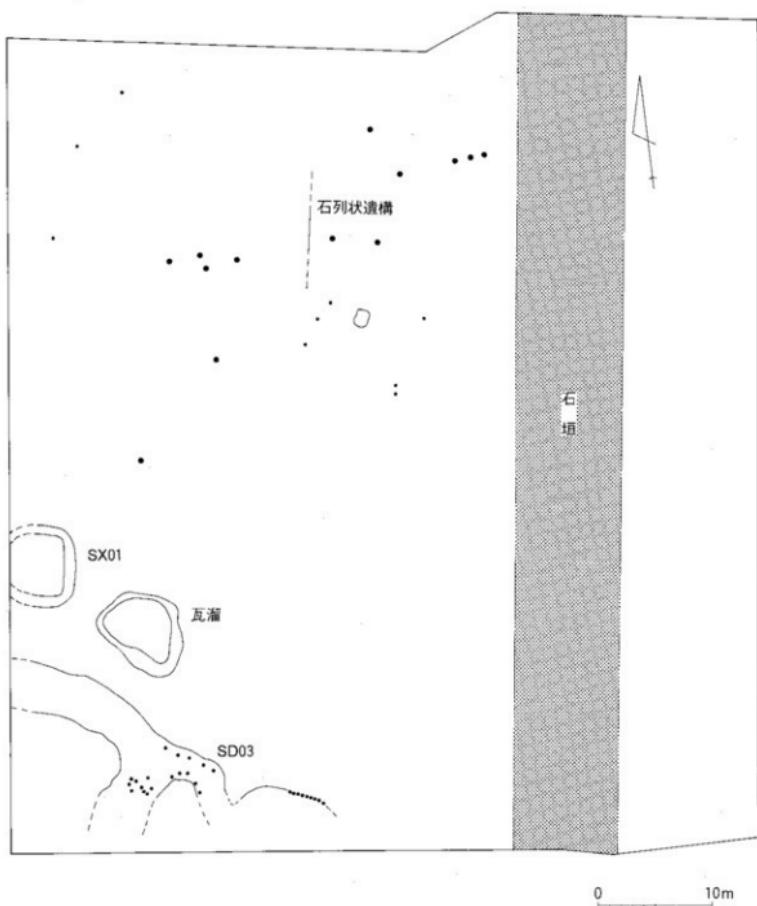


第9図 II期出土遺物実測図

が認められる。耳および尾は粘土を折り曲げて表現しており、目と鼻の穴は穿孔して表現している。

9は備前焼の皿である。やや上げ底で体部は斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁部は上方につまみ上げ、内湾気味に丸める。底部外面中央にヘラ記号が認められる。10は備前焼の徳利型花入である。11・12は備前焼の擂鉢である。11には内面に弧状に卸目が刻まれている。12には放射状の卸目が体部内面に認められ、見込部分には、十字型の卸目が交差して刻まれている。

13～19は軒平瓦、20～22が軒丸瓦である。軒平瓦はいずれも均整の唐草文で中心飾のそばの唐草が二重になるもの（13、14）や唐草が一重ずつ展開するもの（15、16）、中心飾が花弁状を呈するもの（17～19）がある。軒丸瓦はいずれも三巴文で巴文の外側に珠文が巡る。

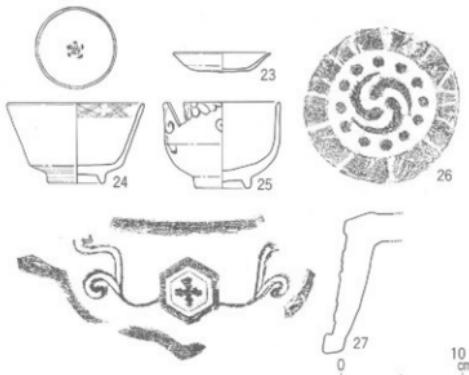


第10図 早期造構配置模式図

### 第Ⅲ期・・・松平頼重による東ノ丸改修から江戸時代末期まで

この時期は、東ノ丸は北側が米蔵丸、南側が作事丸として機能していた時期にあたる。遺構の残存状況は悪く、礎石建物跡などの遺構は完全には復元できない。しかしながら、調査区西側南半部では、底に石を貼った流路と水の貯蔵施設と考えられる石組の遺構を検出した。作事丸の水資源確保の中心的施設であったと考えられる。(第10図参照)

第11図はこの時期に相当する出土遺物である。23は陶器製の小皿である。内面および外面の2/3に釉薬が認められる。内外面の一部に煤が付着していることから燈明皿として使用されていたものと考えられる。24、25は伊万里焼の染付である。26は巴文軒丸瓦、27は滴水瓦と呼ばれる軒平瓦である。軒先に装着した際の瓦当面の角度が鈍角であるため、雨水がより前方へ落ちる。従来、高麗瓦などと称されていたものである。



第11図 Ⅲ期出土遺物実測図

### 第Ⅳ期・・・江戸時代末期から明治・大正時代にかけて

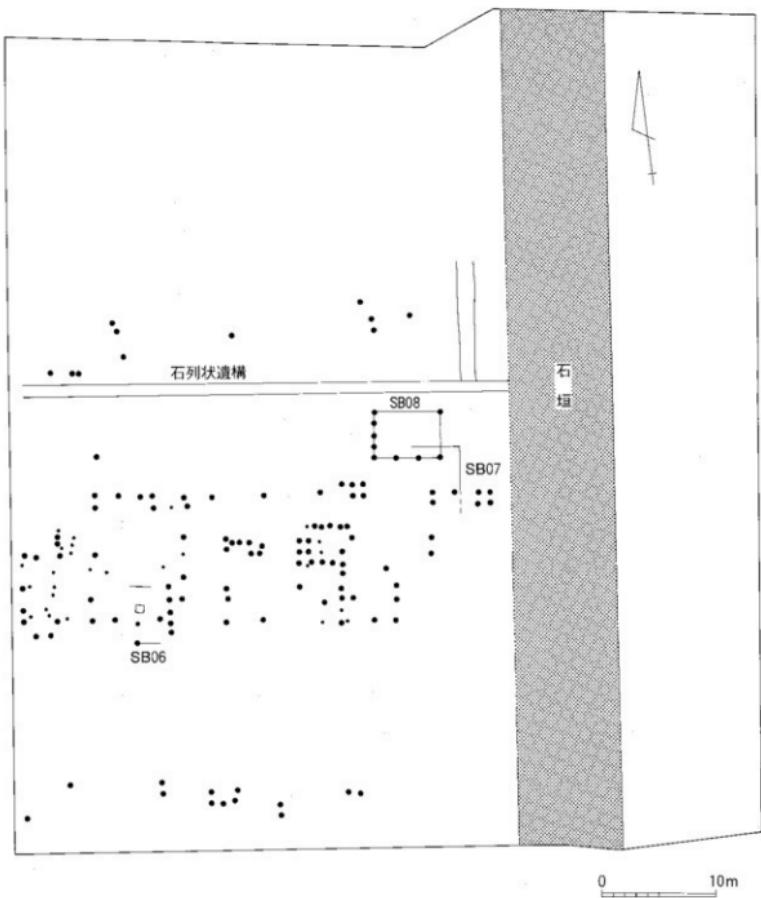
この時期には、やはり、米蔵丸・作事丸関連の遺構および明治時代の遺構を検出している。特に、調査区中央部で検出した石列状遺構は、米蔵丸と作事丸との境界をなすものであると考えられるものである。また、城としての機能が失われた後に引かれたと考えられる上水道の痕跡も検出した。(第12図参照)

#### 石列状遺構 (SA 01, 第13図, 写真7)

II-①区ほぼ中央部を東西に横切る形で検出した石列状の遺構である。東側は石垣まで続いており、西側は調査区外へ延びる。中央部は後世の搅乱に破壊されているが、検出した総延長は約43mに及ぶ。石列は上段と下段に分けられ、上段は幅0.5m、高さ0.3mを測り、下段は幅0.7mを測る。石列は南北両面に面を持ち、石材は花崗岩と安山岩が多い。この石列状遺構は明治10年頃に描かれたと推定されている「舊高松御城全圖」(以下「絵図」という)に記載されている米蔵丸と作事丸との境界を画する施設と位置的に合致する。このことから、この石列状遺構は絵図に記載されている米蔵丸と作事丸との境界である可能性が高いと考えられる。

#### 礎石建物跡

この時期の確実な礎石建物跡は平成6年度調査分も合わせると全部で10棟である。大部分が石列状遺構よりも南側にある。北側で検出した建物跡は、後世の搅乱により大部分が破壊されていたが、石列状遺構との距離が、絵図に記載されている米蔵丸南端の建物と米蔵丸と作事丸との境界との距離にほぼ一致することから米蔵丸南端の建物であった可能性が高い。南側で検出した建物跡は南側に扉の軸摺孔が認められることから、南向きに出入り口のあった建物であることがわかる。しかしながら、絵図の記載と合致するような建物の配置は認められず、絵図以降に機能していた建物群であると考えられる。その他、建物跡の礎石と考えられる石を多数検出したが、建物を復元するには至っていない。

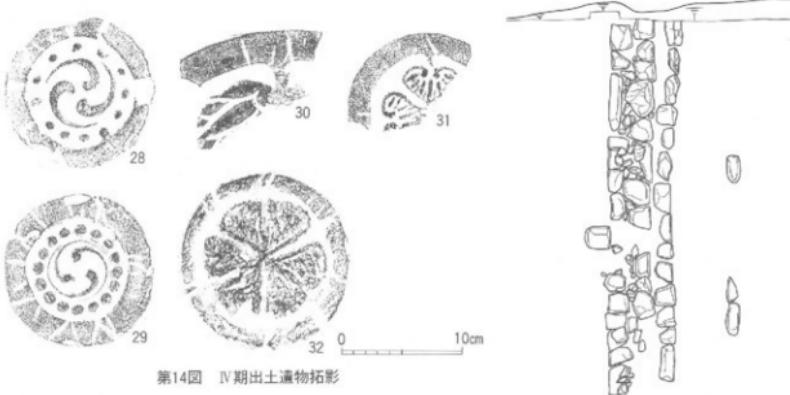


第12図 IV期遺構配置模式図

#### 出土遺物（第14図）

この時期の遺構および包含層からは多量の瓦片と陶磁器片が出土した。第13図は出土した瓦の拓影である。28・29は巴文軒丸瓦である。いずれも表面を燻して焼いており、江戸時代後期以降の所産であると考えられる。30~32は菱文をもつ瓦片である。30は表面に光沢があり、棟の両側に据える鬼瓦の一部であると考えられる。文様がかなり簡略化していることから江戸時代末期から明治時代ごろのものであろう。30・31もやはり、鬼瓦の一部であると思われる。全体的に小振りで隣棟の鬼瓦の一部であると思われる。鬼瓦の文様に家紋を採用することは大名家ではまま見られることであり、現在の高松城の櫓の鬼瓦も全て菱文である。

なお、第15図は今年度の調査で出土した銭貨の拓影である。33は開元通宝である。初鋤年は



第14図 IV期出土遺物拓影



第15図 出土銭貨拓影

621年であるが、明・清の時代にも鋳造している。34は天聖元宝（初鋳年は1023年）である。35は洪徳通宝（初鋳年は1470年）である。洪徳通宝は越南地域（今のベトナムあたり）で流通していた銭貨であるとされている。36は寛永通宝である。背面は無文である。

その他の注目すべき遺物に鰐がある。SA01下層から出土したもので底部長39cm、残存高20cmである。元来、瓦質であったらしく、一部にその痕跡が認められる。体部は魚であり、鰐が認められることから顔は龍をモチーフにしたものであると考えられる。顔には二重の目と大きな鼻があり、やはり大きな歯で屋根の大棟に取り付いていたものと考えられる。ただし、東ノ丸の建物に鰐が取り付いていたかどうかについては、今後の検討を待たねばならないが作事丸という施設の機能を考えるならば、補修用資材の備蓄品である可能性も考えられる。（写真12参照）

石垣・堀について（写真9～11・13・14参照）

その他の遺構としては石垣と堀があげられる。堀は東ノ

第13図 SA01平面図



丸改修以前の絵図には記載されておらず、17世紀後半の改修時に掘削されたものであると考えられる。埋没時期は大正年間であるとされており、明治後半の地形図には当該地は、堀のままの状態で記載されている。堀の最上層は約70cmほどの現代の擾乱層であり、その下層には約2.5mほど海砂の層の堆積がみられた。さらに下層には約80cm～1mほど暗灰色シルト層が堆積しており、その下層は砂利層である。海砂の層とシルト層との境目付近で「高松市・・」と書かれた地利が出土していることから、シルト層は堀が機能していた最終段階での底に溜まった汚泥層であると考えられる。この汚泥層の中から長さ8mほどの舟の底と思われる板材が出土した。(写真9参照) 板材を錐状の舟釘で留めており、厚さは5cmである。湾曲しておらず、平面的であるため、川舟の底の部材であると考えられる。

石垣は調査区を南北に縱断する形で検出した。検出した長さは約66m、高さは高いところで約4m、低いところで約3.5mである。調査区内で隅角部を検出していなかったため、調査区外へ伸びているものと考えられる。絵図によると、今回の調査区の北端あたりで木橋を架けるための石垣の張り出しが見られるが、調査区内では検出できなかった。先の県民ホールの建設に伴う調査でも検出していなかったため、現在の市道の下部にその存在を予想できよう。石垣は、現地表下約30cmで検出したが、最高部から下方へ1～2段の部分ではほぼ水平に目が通っている。このことは石垣の構築時に隔たりがあることを示している。また、目が通っている部分より下段では石材の形状・大きさにかなりのばらつきが認められる。これはある時期に石垣が崩落し、残った部分にもたせかけるように補修したことによるものであると考えられる。一番根石および二番根石付近には周囲に小塊石を詰めており、全体の補強を考慮した意図が伺える。このような手法は17世紀代に築かれた石垣としては古的な印象を受ける。二番根石より上の部分では方形の石材を中心に積み上げているが詰めている塊石の量が少なく、全体的に粗略な感じを受ける。また、よく観察すると、V字状に石材の目が通っている部分が少なくとも4カ所は認められ、ある時期に石垣が崩落したことが伺える。崩落したと考えられる部分は補修されているが、崩落した部分に合うように石材を選択し、積み上げているため、石材を斜めに使用する「落とし積み」的手法や大きい石材の周辺を囲むように石材を配する手法が認められる<sup>(1)</sup>。これらは、東ノ丸の石垣が舟が出入りする堀に面しており、運河的な機能を重視したもので衆目に触れることよりも護岸を補強するための普請の結果であると考えられる。

石材は花崗岩や安山岩、玄武岩を混在させて使用している。石垣の建築時期については、裏込土中より出土した瓦片や陶磁器片を詳細に検討することが必要であり、現時点では断定はできない。しかしながら、補修されたと考えられる石垣部分の裏込土中より出土した染付片には明らかに18世紀後半頃と考えられるものが認められる<sup>(2)</sup>ことから当該時期に補修された可能性が高い。また、石垣構築以前の遺構と考えられる柵列や溝状遺構から出土した陶磁器類は16世紀末～17世紀初頭のものがほとんどであり、したがって、石垣は17世紀代に構築され、18世紀後半頃に補修されたものである可能性が高い。

また、石垣の解体に伴い、土層の観察を行った結果、石垣の構築方法がある程度復元できた。まず、石垣の法線を決め、地山面(砂利層)に杭を打ち込む。杭を結んだ法線に従って、根石を地山面に直接置き、小蝶で安定を図る。ここまで作業はおそらく干潮時でもある程度海水に浸っていたと思われ、石垣の根石の部分は面が崩っていない。その後、2段目より勾配を考えて石材を据え、栗石および土で裏込めとして充填していくものと考えられる。なお、石垣の堀方の勾配上には石垣の石材とほぼ同程度の大きな石材を土止めとして置いている。堀方の

肩部と石垣の距離は上にいくほど広がり、最大で約3mを測る。緩やかな勾配の堀を石垣を築くことによって急な勾配にしたものと考えられる。

#### 註

- (1) 佐賀県立名護屋城博物館の宮武正登氏の御教示による。
- (2) 佐賀県立九州陶磁文化館の人橋康二氏の御教示による。

## 4. おわりに

調査の成果でも触れたように今年度の発掘調査では、高松城築城以前の遺構群（第Ⅰ期）に始まり、江戸時代末期から近代にかけての遺構群（第Ⅳ期）が残存状況は悪いとはいえ、当該地に連續と人間の営みが繰り返されていたことが判明した。ここでは、若干のまとめと本報告にむけての課題を指摘しておきたい。

第Ⅰ期については、わずかに石組の墓と考えられる遺構を7基検出したのみであるが、その他に集石部分も確認している。これらの遺構は調査区の北半部に集中している。先の県民ホテル建設に伴う発掘調査でも調査区の中央部から南半部にかけて同様の遺構群を検出している。また、この遺構面の標高は調査区南半部よりも北半部の方がわずかに高く、砂堆状の地形が復元できる。

第Ⅱ期については、生駒氏による城下町と松平氏による城下町とが同一遺構面に所在すると思われ、建物跡の方位や出土遺物の検討を十分に行う必要がある。また、東ノ丸の造成と石垣の構築が同時期か否かについても今後の課題としたい。

第Ⅲ期については、建物跡の礎石等が非常に少なく、作事丸の構造等が不明瞭である。

第Ⅳ期については、建物跡の礎石や石列状遺構等の残存状況がよく、今後は建物跡の復元と配置からみた土地利用の解明が大きな課題となる。

石垣については、その構築時期が大きな課題となろう。特に東ノ丸の造成と同時期であるかどうか、また、東側と西側の石垣の構築時期が同じかどうかが重要である。それから石垣内部で検出した溝状遺構・石列状遺構・柵列と石垣の関係も非常に興味深い。石材の加工技術や積み方についても、城郭内部でどのような場所に石垣が構築されるのか、その機能、目的の本質は何か、といった石垣についての研究は緒についたばかりであり、そのためにも石垣構築の一つの到達点ともいいうべき江戸時代の石垣についての形状分析が必要となろう。

## 参考文献

- (1) 「高松城東ノ丸跡発掘調査報告書」(香川県教育委員会 1987)
- (2) 「歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 高松城跡」(香川県教育委員会ほか 1995)
- (3) 北垣聰一郎『石垣昔説』(法政大学出版社 1987)
- (4) 天木日出男「山城における高石垣と算木積みについて」(『岐阜市歴史博物館研究紀要』4 1990)
- (5) 小竹森直子「安土城石垣所感」(滋賀県安土城郭研究所『研究紀要』2 1994)
- (6) 中井均「織豊期城郭の特質について—石垣・瓦・礎石建物ー」(織豊城郭研究会『織豊城郭』1 1994)
- (7) 宮武正登「名護屋城の空間構成再考のための提言—城内石垣の巨石が語るものー」(佐賀県立名護屋城博物館『研究紀要』1 1995)

# 図 版



写真1 II-①区ST01（南より）



写真2 I-①区ST03（東より）



写真3 III・IV-①区第Ⅲ期全景（北より）

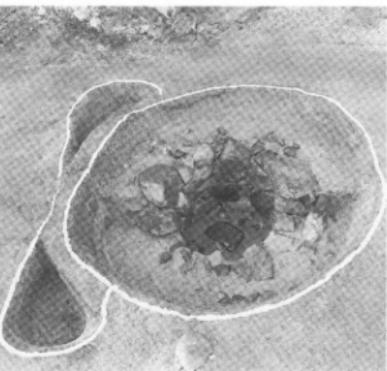


写真4 IV-①区SE01検出状況（北より）



写真5 IV-①区SE01半裁状況（北より）



写真6 III・IV-①区第Ⅰ期全景（北より）

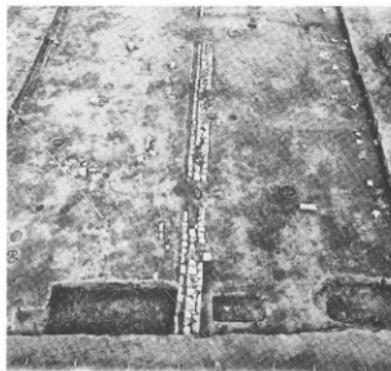


写真7 II-①区第Ⅰ期全景（西より）  
中央が石列状遺構



写真8 II-①区木製樁管出土状況（西より）



写真9 石垣全景（南より）



写真10 石垣全景（北東より）



写真11 石垣根石付近断面観（南より）  
中央の杭が法線基準杭



写真12 II-①の区石列状遺構出土物



写真13 石垣全景（東より）



写真14 石垣細部（東より）



写真15 横列・石列状遺構・溝状遺構（北より）



歴史博物館建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

高松城跡

平成 7 年度

平成 8 年 3 月 31 日

編 集 (財)香川県埋蔵文化財調査センター

発 行 香川県教育委員会

印 刷 株式会社 美巧社